

季節の変化が鮮やかと言われることもある北国でも、ここ竹山での一年を振り返ってみると、春夏秋冬という一年の区切れ目があるというより、連続する変化の流れの中でいつの間にか春になり、夏になりしているような気がしてくる。特に植物たちは、常に一歩先を意識しながら今すべきことをひとつひとつ律義に行なっている。それが一年の大きなサイクルをつくっているのだ。

そんな植物たちについて、これまで触れてこなかったものも紹介したい。といつても何度も白状しているように、植物についてはまったく音痴で、特に草花は皆目ダメだったのだから偉そうに「紹介する」というより、こんな草花があったんだという私の驚きにおつきあいいただくことになるのだが。

町内のお宅をは拝見すると家の前に色とりどりの草花が綺麗に植えられている。それに比べ我が家は草ぼうぼうで一見放置された空き地に見えなくはない。それは、敷地の大きさからきちんとした庭をつくるのは体力的にいっても無理があるし、何度も触れているが園芸種などが育つ土や水はけが期待できない土地なのだ。それをよく知っているMさんは、どこからかフタリシズカ、ニリンソウ、ユキザサ、ヤマシヤクヤク、フウチソウ、コケモモ、シラタマノキ、宿根のヒマワリなどを「これ植えない」と持って来てくれる。それらが我が家に彩りを添えてくれているのだが、それ以外にも勝手にやってきて自分の居場所をつくっているのがある。いわゆる雑草というやつだ。

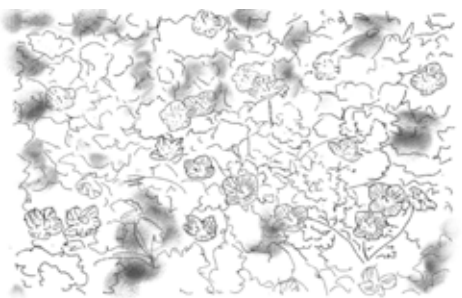
「雑草という名の草はない。」という牧野富太郎の言葉は有名だが、雑草という草は無いわけではなさそうだ。なんせ日本雑草学会という歴史のある学会がある。もちろん雑草それぞれに名前はあるのだが、雑草という類型が学問的に認められているのだ。では、雑踏とは何を指すのか。これはどうも歯切れが悪そうだ。アメリカの雑草学会では「望まないところに生える植物」をさげているようだが、望むか望まないかは主観的な問題で同じ植物でも雑草になったりならなかったりしてしまう。わたしたちの敷地で言えば植物が生えるのが望まない場所は特にないので雑草は無いことになる。別の定義では「絶えず攪乱される極めて不安定な環境に生活する一群の植物」というのがあるようだ。田畑の草刈りをしてまた出てくる植物などが思い浮かぶ。さらに「絶えず外的な干渉や生存地の破壊が加えられていないとその生活が成立、存続できないような一群の植物」というかなりマゾな定義もあるようだ。過酷な環境では育たない植物というのはわかるが、その逆はいったいどういうことを言っているのか興味深い。

私たちの敷地でいえば家を立てるために大量の碎石を積んだところがある。駐車スペースや通路として使っているので極めて植物には不向きな環境である。仮に花を植えようとしてもそのままでは育たないところなので、ちよつとした花壇をつくった時も五十センチメートルくらい掘って土を入れなければならなかった。それがなぜか、数年経った今はいろいろな草花を見ることができ。それを雑草と言わせていただければ紹介したいものがある。



碎石だらけの駐車スペースで目につくのに地面を這うように広がり小さな白い花が咲く草がある。それが何かを見分けられる知識が無いのはもう何度も書いたことだ。「北海道の野の花」という図鑑を買って調べようとするのだがなんせ千百三十二種も収録されているので、そこから目的の草を探し出すのは至難の技だ。少しでも知識があれば何々に似ているということから絞り込むことが出来るのだろうが、それができないので一ページ目から順に探してくしか無い。大概は途中で挫折する。運が良く似たようなものに出会ったとしても、その前後には同じく似たような草が並んでいてなかなか特定できずに終わってしまう。私より妻の方が圧倒的に草花の名前を知っているのだが、いちいち聞くのも気がひけるといふより聞いてふむふむとわかったような気になっても明日には忘れていく。そんな時に出会ったのがスマホのソフトで、写真を撮ると瞬時に名前を教えてくれるという優れたものだ。ソフトが特定した草花の名前を図鑑で再確認するのだが、最初のころはご愛嬌のような間違えが結構あった。それがAIを活用しているとのことなのでだんだん精度が上がって最近ではピタリと当ててくる。このソフトを頼りに腰を屈めて碎石の中から顔を出している草花をパシャパシャしながら見て歩くのは私でも楽しめる。

そのソフトによると先ほどの小さな白い花が咲く草はゲンノシヨウコという名前のようなのだ。ゲンノシヨウコは「現の証拠」と書くらしい。これは何かの事件と関係があるのかと図書館からまとめ借りをしてきた雑草図鑑六冊を頼りに調べると、薬用に用いられる草で、すぐ効き目が現れるということからその名がついたとある。それがどうして現の証拠なのか今ひとつピンとこないのだがまあそういうことのようなのだ。おなじように地を這うように広がる草を見つけた。こちらは小さな黄色の丸いかたまりの周りに白い花びらのようなものが五枚ついていて可憐な趣だ。さっそくソフトに聞いてみるとなんとハキダメギクという名前だという。漢字にすると「掃溜菊」。図鑑を総合すると大正時代に渡来した帰化植物で花の黄色の丸いかたまりはそれ自体小さな花の集まりだという。そのせいか繁殖力が旺盛で一年で三、四世代まで子孫を広げるようだ。それにしても掃溜菊とはかわいそうなネーミングだ。図鑑によるとこの名前をつけたのは牧野富太郎だとある。牧野といえば「雑草という名の草はない。」という言葉を残し、その言葉が教育界などで個性尊重の代名詞のように使われているのだが、その人がゴミ捨て場に生えているのを見つけてつけた名前が掃溜菊では、名前がなかった方が良かったのではと思ってしまう。この牧野先生、ネーミングには独特のセンスがあるようで、我が家の畑の端っこに生えている春先に青い花を咲かせるのがあるが、それはオオイヌノフグリだと言う。ヨーロッパ原産の帰化植物だが、在来種はイヌノフグリと言い牧野先生のネーミングだそう。これはふくつとした実が二個つくのだが、それを見て犬のタマタマに似ているということで名付けたと言うことだ。これも美しい青色の花からするととつ別のネーミングにしてあげて欲しかった。



雑草の名前は牧野流だけではなく変な名前のもがいろいろある。我が家の駐車スペースでよく目にする黄色の小さな花を咲かせているのはコメツブウマゴヤシという。コメツブは小さいという意味か。ヒメなになにという名前もよくあるがこれも小さいという意味のようだ。ウマゴヤシは馬が食べて肥えるということの名前にされたようだ。ヘクソカズラという名前をもらったのもいる。葉や実を揉むと臭いからといって屁と糞を重ねなくても良いものを。幸いうちの敷地では目にしていない。同じく目にしていないがその名前のインパクトに気持ちを持つていかれているのにママコノシリヌグイというのがある。スペード型の葉に小さな花が集まって咲く姿からは名前がイメージできないのだが、図鑑によると茎にトゲがたくさん生えていて痛いことから「この草で継子の尻を拭いたらさぞかし痛がるだろう」ということでつけられた名前とある。その説が本当たししたらなんとおぞましいネーミングであることか。昔話には継子いじめ譚というジャンルがあるようなので、その流れだったのか。

名前だけからするとあまり出会いたくないものが続いたので、うちで見られるめでたい名前のもも紹介しよう。家の周りの園路の際で細長い茎に黄色の小さな花を点々とつけているのはキンミズヒキというようだ。紅白の水引に似ていることからミズヒキと名付けられたものに似ていて黄色の花をつけることから頭に金をつけてもらったのだ。金とくれば銀ということでギンランも。敷地斜面の日陰に白いぷくつとした花を茎の周りに沢山つける可憐な感じの花だ。これは雑草というより山野草のグループというべきか。

雑草は本来植物が生存しにくいところで他の植物との競争を逃れるという独自の生存戦略で子孫をつなぐものという定義にもどって碎石だらけの駐車スペースをもう一度見てみよう。さつきは地面を這うように探していたが、そんなことをしなくても堂々と自己主張しているのがいくつもある。代表格はビロードモウズイカ。これも変な名前だが、全体が白い毛で覆われて手触りがビロードそのものなのだが、モウズイカはイカのような形をしているからではなく毛蕊花と書いて毛深い雄しべの意味だそうだ。春先は大きい葉をべたつと地面に広げた姿なのだがいつの間にか立派な茎が伸びその丈は私の身長より高くなる。黄色い花を茎にびっしりつけるので良く目につく。明治期に観賞用に導入され野草化したそうだが、文明開化にふさわしい新奇な植物として取り入れられたが、やはり日本人の感性に馴染めず野に放たれたということか。もうひとつモンスター系をあげるとすればヨウシュヤマゴボウか。やはり明治期に北アメリカからやってきたようで、ヨウシュは洋種の意味であちら産ということだ。背丈はやはり私と同じくらいになる。花は緑色の粒状の雌しべの周りを雄しべが囲んだだけで花弁はなくそれが房状になる。やがて緑色の実になり熟すと黒紫色になるので見かけブドウのようなのだが、図鑑には食べてはいけなくとある。有毒なのだ。密やかに地を這うものから。でんと異様な姿を見せるモンスターまで野草の世界も多様で興味深い。

